



JAPAN CULTURAL EXPO

東海道 と 旅



*The Tokaido
Road and
the Travel*



さあ、江戸・明治

初代広重「東海道五十三次」と三代広重「東海名所改正道中記」

初代歌川広重(1797~1858年)は、江戸八代州河岸の定火消同心安藤源右衛門の長男として生まれました。幼名は徳太郎、のち重右衛門。文化6(1809)年父の跡を継いで定火消同心となりますが、文化8(1811)年に歌川豊広の門弟となり絵の道を歩み始めます。師の豊広と自分の名前重右衛門から一字ずつ取って歌川広重と称し、文政元(1818)年に浮世絵師としてデビューします。

天保4(1833)年、四季折々の美しい自然と人々が織りなす情景を描いた「東海道五十三次」が保永堂より刊行されると、爆発的な人気を呼び、広重の絵師としての地位は不動のものとなりました。広重は、江戸や諸国の名所絵など数々の作品を残しますが、この保永堂版「東海道五十三次」は、広重が描いた「東海道」の中でも傑作といわれ、日本美術だけではなくのちの西洋美術にも大きな影響を与えました。

二代歌川広重(1842~1894年)は、初代歌川広重の門人で、初代広重の養女と結婚し二代広重を名乗りましたが、**一** 実際は三代目となります。西洋から輸入した赤色を多く使って文明開化の横浜や東京の街や風俗のようすを色鮮やかに描いた作品を数多く残しています。

1875(明治8)年に出版された「東海名所改正道中記」では、西洋人や洋装の日本人、鉄道や人力車などの新しい乗り物、電信柱に電信線など文明開化の文物が描かれ、明治初期の街道のようすを今に伝えています。

ここでは、師弟それぞれが描いた東海道を紹介し、江戸と明治の時代の対比をお楽しみいただきたいと思います。

※当館収蔵の「東海名所改正道中記」シリーズには、各図一枚毎のシリーズと、各図の背面の一部を糊付けし折本仕立てにしたものと、2種類のコレクションがあります。折本仕立てのものは、「東海名所改正五十三駅」と墨書がある目録の次に第五十八図の西京を置き、第一図の日本橋を末尾にする並べ方で貼り込まれています。ここでは、一枚毎のコレクションからの図版を使用していますが、欠けている場面については、折本の図版を使用しています。

江戸と明治の東海道

にほんばし 日本橋 *Nihonbashi*



《東海道五十三次》
日本橋 [行列振出] / 初代広重

日本橋は、慶長9(1604)年に里程の起点とされ、東海道の起点となりました。東海道は日本橋から京まで126里6町1間(495km余)、当時は、日本橋を明け七つ(およそ午前4時)に出発し、通常14日ほどで旅するのが一般的でした。幕府公用の継飛脚は、この距離を3日で書状を継ぎ送りました。ここでは、橋を渡る大名行列や、商人たちでにぎわう夕刻の日本橋が描かれています。



《東海名所改正道中記》
日本橋 伝信局 / 三代広重

日本橋を魚河岸があった北岸から南岸に望む風景で、橋のそばに明治5(1872)年に開局した日本橋電信局が見えます。電信局や電信柱、洋装の人や人力車など、江戸時代にはなかった文明開化の東京の姿が描かれています。

の東海道の旅へ!



しながわ ▶ 品川 *Shinagawa*

《東海名所改正道中記》

品川 やつ山の下 / 三代広重

明治5(1872)年5月7日に品川・横浜間に初めて鉄道が仮開業し、同年10月14日、新橋・横浜間約29kmが正式に開業しました。八ツ山の陸橋は蒸気機関車見物の絶好の場所で、人々が珍しそうに汽車を見下ろしているようすが描かれています。陸橋の下に品川駅がありました。



かわさき ▶ 川崎 *Kawasaki*

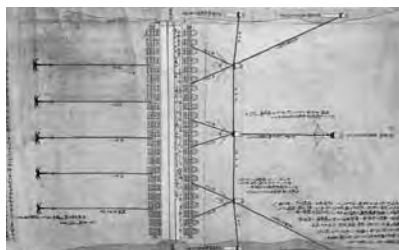


《東海道五十三次》

川崎 [六郷渡舟] / 初代広重

元禄元(1688)年7月の大洪水で橋を流失してから、六郷川は渡し船または歩行渡しにて旅人を川の向こうへ渡していました。船頭が足を踏ん張り体重をかけて船を操り、船を着岸させようとしています。岸には船の到着を待つ人や荷を乗せた馬がみえます。

明治天皇の東幸の折は六郷川に船橋が架けられましたが、当館にはこの船橋架設絵図が収蔵されています。



参考資料

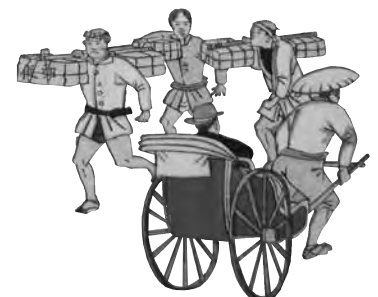
《明治天皇御東幸六郷川船橋架設絵図》

川崎宿久根崎町森五郎作 / 明治元(1868)年



《東海名所改正道中記》
川崎 六郷川鉄道 / 三代広重

元禄元年に橋が流失して以来、船渡しが行われていた六郷川ですが、明治5(1872)年の鉄道開通時に木橋が、翌6年に一般通行のための橋が架かりました。蒸気機関車が木橋を渡っている様子が描かれています。



ほどがや
▶ 保土ヶ谷 *Hodogaya*



《東海道五十三次》
保土ヶ谷 [新町橋] / 初代広重

帷子橋(新町橋)を渡り、宿場へ入ろうとする駕籠や虚無僧などが描かれています。橋の向こうには宿場の家並みが連なり、橋の袂には蕎麦屋があります。



《東海名所改正道中記》
程か谷 境木の立場 / 三代広重

保土ヶ谷宿の西側、権太坂を大山講中の人々が登っていきます。人力車で登る人の姿も見えます。坂の上、武蔵と相模の境である境木の立場には、名物の牡丹餅を出す茶店がありました。松の生木に電信線を通し、電柱とした様子が描かれています。

はこね
▶ 箱根 *Hakone*



《東海道五十三次》
箱根 [湖水図] / 初代広重

様々な色彩で険しさを象徴的に表現した箱根の山々の急斜面を西に進む大名行列のようすが描かれています。荒々しい箱根の山とは対照的に、静かに広がる芦ノ湖と富士山の姿が描かれています。



《東海名所改正道中記》
箱根 山上の湖水 / 三代広重

芦ノ湖の湖畔から湖の向こう、雲よりも高くそびえたつ雄大な富士山を望む人々が描かれています。険しい山道を経て仰ぎ見る富士山の雄姿は、今も昔も我々の心に深い感慨を与えます。

ぬまづ
沼津 *Numazu*



《東海道五十三次》
沼津 [黄昏図] / 初代広重

黄昏どき、沼津宿へと急ぐのでしょうか、黄瀬川沿いの道を天狗面を背負った金比羅参りの旅人と巡礼の親子が歩く後姿が描かれています。黄瀬川といえば、源頼朝と義経兄弟ゆかりの地としても有名です。美しい満月を描いた、趣深い一枚です。



天狗背負面

江戸時代、庶民の間で伊勢詣りや金毘羅詣りが盛んに行われました。金毘羅行者は、白装束にこのような天狗面を背負い、全国を巡りました。



沼津宿近くの黄瀬川に架かった橋の風景が描かれています。犬の背に乗ったり、紐でぶら下げた亀を持つ子供たちの姿もみえます。

《東海名所改正道中記》
沼津 足柄山の景 / 三代広重

よしわら
吉原 *Yoshiwara*



《東海道五十三次》
吉原 [左富士] / 初代広重

鞍に前後二本の棒を横にして付け、網を渡して座る場所を作った「三宝荒神」と呼ばれる三人乗りの馬が、まるでトンネルのように道を囲む松並木の間を歩いていくようすが描かれています。これまで右手に見えていた富士山がここでは左手に見えるので、「左富士」の名所となっていました。



吉原宿は、高潮のため内陸部へ二度の移転の後、天和2(1682)年に現在の吉原に移りました。元吉原を過ぎ、吉原宿に至る前に左富士の名所があります。

《東海名所改正道中記》
吉原 左り不二 / 三代広重

[トピックス]

旅の道具

topics

脇差型金子入

金銭の盗難を防止するために、脇差に似せてつくった財布です。



関所手形

関所手形は、関所の通行許可書です。旅の証明書である「往来手形」とは別に、女性、鉄砲、囚人、死骸等は関所を通過するための手形が必要でした。

通常男性は関所手形が必要ありませんでしたが、取調べの煩わしさを避けるため、様々な書式の手形を用意し持参する者も多くありました。



女手形



鉄砲手形

鉄鑿附(おはぐろつく)小女一人、今切関所相違無く相通さるべく候。右者岡崎兼三郎支配所舞阪問屋那須田又七と申す者の娘にて、遠江国敷知郡舞坂宿より三河国渥美郡二川宿まで差し遣わすの旨、兼三郎殿断りにより、かくの如く候。以上。

嘉永二己酉年正月 西尾隠岐守

右者中納言殿去冬尾州江被罷登候節道中為持被申候鉄砲二而御座候此度中納言殿願之通隠居被仰出候付尾張殿江戸屋形迄差下被申候今切御所無相違通候様御裏印被成可被下候為其如斯御座候以上

文政十年亥九月 津田縫殿頭 印 花押
竹腰山城守 印 花押

青山 下野守殿
水野 出羽守殿
大久保加賀守殿
松平 和泉守殿
松平 周防守殿

周防 印
和泉 印
加賀 印
出羽 印
下野 印

表書之鉄砲式拾五挺関所無相違可相通候改者本文有之候以上

今切 関所番中

旅行用心集

江戸時代の旅の手引書で、旅に持っていく品や船に酔った時の対処の仕方など、旅のノウハウが記されています。



八隅芦庵 文化7(1810)年

旅行火

旅行用の置炬燵で、火がこぼれないよう、炭火を入れる内側の皿が常に水平を保つ構造となっています。



ふ ちゅう
府中 *Fuchu*



《東海道五十三次》
 府中 [安部川] / 初代広重

肩車や蓮台、蓮台に括り付けた駕籠に旅人を乗せた、安部川の川渡りのようすが描かれています。川を渡る手段は、船渡しのほか、川越し人足の肩車や蓮台による歩行渡しが主流でした。



《東海名所改正道中記》
 静岡 安部川橋 / 三代広重

府中は明治維新後、静岡と名称が改められました。江戸時代は徒歩渡りでしたが、明治7(1874)年に阿部川橋が架けられました。川のそばの茶店では、きな粉をまぶした名物、安倍川餅が売られました。橋の下では川で洗濯をしている女性があります。川の中に電信柱が建てられています。

まり こ
鞠子 *Mariko*



《東海道五十三次》
 鞠子 [名物茶店] / 初代広重

芭蕉の句に詠まれたとろろ汁で有名な茶屋を描いています。明るい空に春の兆しがうかがえる梅のつぼみ、くつろいだようすで座る店先の旅人、赤ん坊を背負った店の女性の姿など、ほのぼのとした情景が描写されています。



《東海名所改正道中記》
 鞠子 駅中の名物 / 三代広重

とろろ汁の茶店が並び、店先では客がおいしそうにとろろ汁を食べています。人力車や電信柱など、江戸時代ではみられなかった明治ならではの光景に時代の流れを感じます。



《東海道五十三次》
 蒲原 [夜之雪] / 初代広重

しんしんと音もなく雪の降る夜により宿場は、人通りも少なく、深い静寂に包まれ、厳しい寒さが伝わってきます。ちらちらと空から降る雪は紙の地色により表現され、墨の濃淡で表現された風景に、人物だけわずかな色彩が施されています。広重の傑作といわれる、抒情あふれる1枚です。



《東海名所改正道中記》
 蒲原 不二河の渡し / 三代広重

蒲原の東に流れる富士川の船渡しの風景です。流れが急なことから4人がかりで船を漕いでいます。正面には雄大な富士山がみえます。

ふじえだ
▶ 藤枝 *Fujieda*



《東海道五十三次》
藤枝 [人馬継立] / 初代広重

藤枝は、本多家四万石の田中城の城下町として栄えました。
馬から荷をおろす者、帳簿を付ける者、作業を監督する役人。宿場の問屋場で行われた荷駄の継立作業風景が描かれています。荷物は、馬と人足を替えて次の宿場へと運ばれました。



《東海名所改正道中記》
藤枝 瀬戸川橋 / 三代広重

江戸時代の瀬戸川は徒歩渡しでしたが、明治になり瀬戸川橋が架かりました。橋には街灯もあり、新しい時代を感じさせます。

しまだ
▶ 嶋田 *Shimada*



《東海道五十三次》
嶋田 [大井川駿岸] / 初代広重

「越すに越されぬ大井川」とうたわれた大河、大井川は、東海道随一の難所として知られていました。
その大井川の本流に至らぬ浅瀬を、大名行列が渡る様子を描いています。川越し人足に手を引かれて渡る人、蓮台を使用せずに人足が駕籠を直接担いで渡りようが見えます。



《東海名所改正道中記》
島田 大井川駿岸 / 三代広重

大井川は古くから難所として知られ、旅人は徒歩渡しにより川を越えました。明治3(1870)年、徒渉制度が廃止となり、翌年太政官布告で船渡しとなりました。ここでは、簡素な木の橋を渡る人々が描かれています。



《東海道五十三次》
 浜松 [冬枯ノ図] / 初代広重

刈り込んだ冬の田んぼのそばでたき火をしている村人たちと共に、旅人も煙草の火を分けてもらい一服しています。遙か向こうには宿場と浜松城が見えます。



《東海名所改正道中記》
 堀とめのわたし 通船立場 / 三代広重

井上八郎、田村弘蔵と地元の人々が協力し、新たに開いた堀留運河の渡し場が描かれています。明治4(1871)年、浜松堀留運河切開の伺いが出され、その翌年、浜松から間近の入間村の堀留から運河が出来ました。浜松から舞坂、新居、白須賀を通らずに新所に至り、二川への近道となりました。

[トピックス]

前島密と井上八郎

「日本近代郵便の父」として知られる前島密は、維新後、明治政府に出仕するまでの間、徳川家に移った駿河(静岡)藩の留守居役、公用人、遠州中泉奉行を歴任、奉行職廃止後は藩内の開業方物産掛となり、旧幕臣の措置、藩の経営、水害の被害者救済のための救院設置などを行っていました。

堀留運河は、井上八郎が地元有力者等の協力を得て進めましたが、旧幕臣に仕事を与える士族殖産にもつながる事業でした。密も、中泉奉行時代、江戸から移住してくる旧幕臣たちのために長屋を建設し、物産を陳列して売らせたり、織物や養蚕を習わせたりし、その経済的自立を助けています。

伝記『鴻爪痕』の中に収録されている「自叙伝」の中で密は、駿河藩公用人時代、井上八郎が旧幕臣たちの処置について明治政府の弁官から詰責された際、同席していた密がとりなすために発言した内容が井上の逆鱗に触れ、あわや切り殺されそうになる騒ぎになったことに触れています。

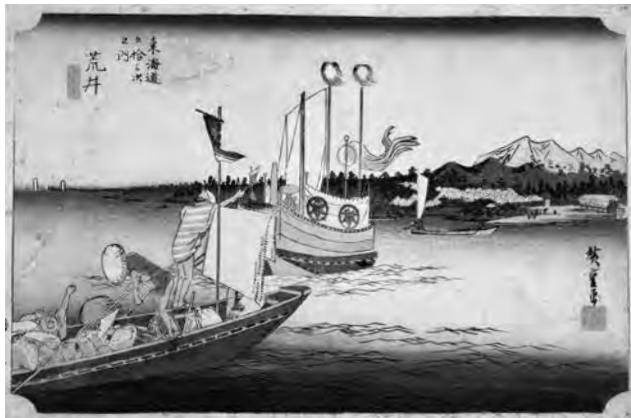
後に親友となった二人ですが、北辰一刀流の剣豪で知られた井上に迫られたときの密の驚きは、たいへんなものであったにちがいません。

topics



前島密

あらい
荒井 *Arai*



《東海道五十三次》
荒井 [渡舟ノ図] / 初代広重

幔幕を張り、毛槍や吹き流しをたなびかせて今切り渡しで浜名湖を超える、大名の渡し船が描かれています。対岸には新居の関所(今切関所)がみえます。船着き場は関所の中にあり、箱根同様、女性や鉄砲の厳しい取調べが行われ、女性は上り下りともに関所手形が必要でした。この今切渡しを使わず、本坂通(姫街道)を超えるルートを選ぶと、浜名湖の北岸を迂回して気賀の関所を通ることになりました。



《東海名所改正道中記》
阿ら井 浜名の湖 / 三代広重

かつて厳しい改めが行われた関所ではなく、ここでは床内半島の堀江村の美しい景色を描いています。目に広がる景勝に、旅人たちは感嘆の声をあげたことでしょう。

ごゆ
御油 *Goyu*



《東海道五十三次》
御油 [旅人留女] / 初代広重

夕暮れ時、宿場の旅籠では、客引き女達が客を強引に引き込もうとしています。右の旅籠では客の旅人が足を洗っています。宿場に至る手前で浜松で分かれた本坂道(姫街道)が合流するため、御油宿は旅人で賑わう宿場でしたが次の宿場である赤坂まで16町(1.7km)と短かったため、旅籠では客を引き止めるために客引き女が増えました。旅籠の掛札には、一立斎(広重)、摺師平兵衛、彫工治郎兵衛とこの浮世絵の制作に携わった人の名が書かれています。



《東海名所改正道中記》
御油 東入口玉すし / 三代広重

御油は姫街道との分岐点で、交通の要衝として賑わいました。御用と書かれた大きな荷を担いだ人、白粉を塗った旅芸人の女性等、往来の人の多いようすが描かれています。画面左手の店先には、初代広重の保永堂版「東海道五十三次」と同様、制作の関係者の名前がぶら下がっています。

なるみ
鳴海 *Narumi*



《東海道五十三次》
 鳴海 [名物有松絞] / 初代広重

木綿に藍で絞り染めた有松絞り、鳴海絞りは、東海道のお土産として旅人にたいへん人気がありました。鳴海宿の手前に有松の立場があり有松絞りの店が並んでいました。旅の女性達は、美しい絞染の品を置く店に気を取られているようです。



《東海名所改正道中記》
 鳴海 有松しぼり店 / 三代広重

名産の有松絞りの店が並んでいます。立派な構えの店内には、美しい布地が所せましと並べられ、往来の人々の目をひいています。店の後ろには、染め上がった色とりどりの布地が、屋根より高く天日干しされて、名産で賑わう街道筋のようすを伝えています。

よっかいち
四日市 *Yokkaichi*



《東海道五十三次》
 四日市 [三重川] / 初代広重

三重川の葦原の風景を描いています。湿地の風景は当時では珍しくもない風景ですが、強風に揺れる木立、合羽を飛ばされまいと体を縮めながら進む旅人の後ろ姿、飛ばされた笠を必死に追う旅人のようすが、快速で強い風の動きを感じさせ、一瞬にしてありふれた風景を印象深い情景へと感じさせています。



《東海名所改正道中記》
 四日市 高砂町の貸席 / 三代広重

四日市宿は、享和元(1801)年に天領となり陣屋が置かれましたが、明治5(1872)年に三重県が誕生すると、陣屋跡が県庁となりました。四日市の那古の浦は、江戸時代から蜃気楼が出現することで知られています。ここでは、蜃気楼のようすは描かれていませんが「那古の海は蜃気楼の名所なり」との紹介文があります。



《東海道五十三次》
庄野 [白雨] / 初代広重

明るい空から降るにわか雨——白雨の情景を描いた、広重の傑作といわれる一枚です。道行く人々に突如強く降り注いだ雨は、細く繊細な無数の線により強く激しく、坂道に垂直に描かれ、風に強く揺れる竹林は濃淡の影によって表現されています。バラバラと地をたたく雨音、雨から逃れるように坂道を駆け下りる人々や身を縮めながら風雨の中を登っていく人々のあわてふためくようすが伝わってくるようです。



《東海名所改正道中記》
庄野 白鳥塚の図 / 三代広重

石薬師宿から庄野宿までの間には、日本武尊がこの地で亡くなり白鳥になって飛び去ったという伝説ゆかりの白鳥塚や源頼朝の弟の蒲冠者範頼の社があります。また、庄野は、宇治川の先陣争いの際に佐々木高綱が乗っていた名馬「生食」の産地であったといわれています。

せき
▶ 関 *Seki*



《東海道五十三次》
関 [本陣早立] / 初代広重

早朝、宿泊した大名一行が出立する間際の本陣を描いています。大玄関には乗物が置かれ、あとは大名が乗り込むのを待つばかりなのでしょう。本陣とは、大名や勅使など身分の高い者が宿泊した施設です。家紋を染め抜いた幕が張られ、建物の前には宿泊している諸侯の名を示した関札が立てられているのがわかります。



《東海名所改正道中記》
関 参宮道の追分 / 三代広重

関は古来より交通の要衝で、古代には三関のひとつである鈴鹿の関が置かれていました。関宿の東に伊勢路に分かれる道があり、京から伊勢神宮に参詣する場合は、ここから伊勢参宮道に入り、宿場はお伊勢参りの旅人でも賑わいました。

けいし
▶ 京師 *Keishi*



《東海道五十三次》
京師 [三條大橋] / 初代広重

日本橋より約130里(511km)、東海道五十三次の旅は三条大橋で終わりました。鴨川にかかる三条大橋は、江戸の日本橋同様に、東海道の起点・終点として重要な橋で、橋上には雅な装いの都人の姿もあり、華やかな都の賑わいがうかがえます。画面奥には、東山とそのさらに後方の比叡山が描かれています。



《東海名所改正道中記》
西京 三條の大橋 / 三代広重

天正18(1590)年に立派な石柱の橋に改築され、江戸時代は幕府が管理していました。橋を渡る人々の中に、洋装の郵便外務員の姿もみえます。

日本橋—大阪まで57宿



《東海道分間延絵図控》大阪
道中奉行所

「五街道分間延絵図」は、江戸幕府道中奉行所が五街道とその主要な脇街道について調査し、実測の1800分の1の縮尺で制作した彩色絵図で、寛政12年(1800)年から文化3(1806)年にかけて完成しました。3部作成され、うち1部は将軍に献上され、2部は実務用として道中奉行所に置かれました。現在は、当館と東京国立博物館に1部ずつ現存し、当館収蔵のものは折本仕立てで92冊あり、道中奉行所より伝わったものといわれています。東京国立博物館所蔵のものは江戸城内紅葉山文庫から伝わったものと思われ、80の卷子仕立てで、国の重要文化財に指定されています。

折本仕立てで92冊を収蔵している「五街道分間延絵図」のうち、東海道を記録した「東海道分間延絵図控」は13冊あり、京より先の、伏見、淀、枚方、守口を経て大阪まで至る五十七の宿場と街道のようすが記録されています。

当館収蔵リスト

■《東海道五十三次》(保永堂版) 歌川広重(初代) 天保初期(1830年代)

東海道五十三次 (保永堂版)		当館収蔵
1	日本橋 行列振出	●
2	品川 諸侯出立	●
3	川崎 六郷渡舟	●
4	神奈川 台之景	●
5	保土ヶ谷 新町橋	●
6	戸塚 元町別道	●
7	藤沢 遊行寺	●
8	平塚 繩手道	●
9	大磯 虎ヶ雨	●
10	小田原 酒匂川	●
11	箱根 湖水図	●
12	三島 朝霧	●
13	沼津 黄昏図	●
14	原 朝之富士	●
15	吉原 左富士	●
16	蒲原 夜之雪	●
17	由井 薩埵嶺	●
18	興津 興津川	●
19	江尻 三保遠望	●
20	府中 安部川	●
21	駒子 名物茶店	●
22	岡部 宇津之山	●
23	藤枝 人馬継立	●
24	嶋田 大井川駿岸	●
25	金谷 大井川遠岸	●
26	日坂 佐夜ノ中山	●
27	掛川 秋葉山遠望	●
28	袋井 出茶屋ノ図	●
29	見附 天竜川図	●
30	浜松 冬枯ノ図	●
31	舞坂 今切真景	●
32	荒井 渡舟ノ図	●
33	白須賀 汐見坂図	●
34	二川 猿ヶ馬場	●
35	吉田 豊川橋	●
36	御油 旅人留女	●
37	赤坂 旅舎招婦ノ図	●
38	藤川 棒鼻ノ図	●
39	岡崎 矢矧之橋	●
40	池鯉鮒 首夏馬市	●

41	鳴海	名物有松紋	●
42	宮	熱田神事	●
43	桑名	七里渡口	●
44	四日市	三重川	●
45	石薬師	石薬師寺	●
46	庄野	白雨	●
47	龜山	雪晴	●
48	関	本陣早立	●
49	阪之下	筆捨嶺	●
50	土山	春之雨	●
51	水口	名物干瓢	●
52	石部	目川ノ里	●
53	草津	名物立場	●
54	大津	走井茶屋	●
55	京師	三條大橋	●

■《東海名所改正道中記》歌川広重(三代) 明治8(1875)年

東海名所改正道中記		当館収蔵※
		(一枚もの) (折本版)
1	(表紙) 東海名所改正五十三驛	● ●
2	伝信局 日本橋 新橋迄十六町	● ●
3	汐留鉄道館 新橋 品川迄一里二十丁	● ●
4	やつ山の下 品川 川さぎ迄二里半	● ●
5	六郷川鉄道 川崎 神奈川迄二里半	● ●
6	蒸気の待合 神奈川 程か谷迄一里九丁	● ●
7	境木の立場 程か谷 戸塚迄二里九丁	● ●
8	藤沢迄二里 戸塚 山道より不二の眺望	● ●
9	平塚迄三半 藤澤 江のしまみちの鳥居	● ●
10	大磯迄廿七丁 平塚 馬入川の渡し	● ●
11	小田原迄四里 大磯 鴨立澤	● ●
12	箱根迄四里八丁 小田原 酒匂川の仮ばし	● ●
13	三しま迄三半八丁 箱根 山上の湖水	● ●
14	沼津迄一里半 三嶋 明神の社内	● ●
15	足柄山の景 沼津 はら迄一里半	● ●
16	不二の沼 原 吉原迄三六丁	● ●
17	沼川の渡し 原 吉原の間新道 蒲原迄二里近し	● ●
18	左り不二 吉原 蒲原迄一里三十丁	● ●
19	不二河の渡し 蒲原 由井迄志里	● ●
20	薩ものした 由井 おき津迄二里十二丁	● ●
21	田子の浦景 興津 江尻迄一里三丁	● ●
22	三保の松原 江尻 静岡迄二里廿七丁	● ●
23	安部川橋 静岡 まり子迄一里半	● ●

24	駅中の名物	駒子	岡部迄二里五町	● ●
25	宇津の山下	岡部	藤枝迄一里廿九丁	● ●
26	瀬戸川橋	藤枝	嶋田迄二里九丁	● ●
27	大井川駿岸	嶋田	かなや迄一里	● ●
28	坂道より大井川	金谷	日坂迄一里廿九町	● ●
29	小夜の中山	日坂	かけ川迄一里廿五丁	● ●
30	秋葉道追分	掛川	袋井迄二里廿七丁	● ●
31	繩手道	袋井	見附迄一里二十丁	● ●
32	天竜川坂橋	見附	はま松迄四里	● ●
33	名所ざざんざの松	浜松	舞坂迄三里	● ●
34	通船立場	堀とめのわたり	新所迄舟渡六里	● ●
35	新所の景	日野岡	二川迄二里	● ●
36	今切海上	舞坂	阿らみ迄船一里	● ●
37	浜名の湖	阿ら井	白須賀迄一里廿四丁	● ●
38	汐見坂の景	白須賀	二川迄一里廿四丁	● ●
39	猿ヶ馬場	二川	豊橋迄一里二十丁	● ●
40	豊川の大はし	豊橋	御油迄二里半四丁 豊川迄一里半	● ●
41	東入口玉すし	御油	赤坂迄十六丁	● ●
42	繩手道の夕立	赤坂	藤川迄二里十五町	● ●
43	山中の里	藤川	岡崎迄二里	● ●
44	(ママ)矢はやぎ川	岡崎	ちりう迄三里二十七丁	● ●
45	知立神社	池鯉鮒	なるみ迄二里三十町	● ●
46	有松しほり店	鳴海	宮迄一里廿八町	● ●
47	熱田の浜	宮	桑名迄海上七りのわたり	● ●
48	波戸場の図	桑名	宮迄海上七里	● ●
49	高砂町の貨席	四日市	桑名迄三里八丁	● ●
50	鞠が原雪沢	石薬師	四日市迄二里廿七丁	● ●
51	白鳥塚の図	庄野	龜山迄廿七町	● ●
52	旅人留女	龜山	関迄志里半	● ●
53	参宮道の追分	関	坂の下迄一里半	● ●
54	関迄一里半	坂の下	筆すて山	● ●
55	鈴鹿の山中	土山	水口迄二里廿七町	● ●
56	平松山の麓	水口	石部迄三里十二丁	● ●
57	目川の里	石部	草津迄二里半八丁	● ●
58	両街道の追分	草津	大津迄三半六丁	● ●
59	宿中より湖水の景	大津	西京迄三里	● ●
60	三條の大橋	西京	布匿着て寝たる姿やひかし山	● ●

※当館収蔵の「東海名所改正道中記」には、折本仕立てに貼り込み加工した状態のコレクションもあるため、便宜上、「一枚もの」「折本版」と表記。



東海道と旅

*The Tokaido Road
and the Travel*

発行 = 郵政博物館 2020年10月9日

[裏表紙図版] 歌川広重(三代)《東海名所改正道中記》関、沼津 ※部分
[表紙図版] 歌川広重(初代)《東海道五十三次(保永堂版)》吉原、四日市、庄野、蒲原 ※部分